

一歴史教員の半生と文検観

一酒井三郎の足跡と『《高等教員・中等教員》文検西洋史《系統的》研究法》 の考察—

鈴木 正弘

はじめに

酒井三郎は、中学校卒業後に教育界に転じ、文検へと進み、その後、東京の夜学をへて帝大、さらには大学院にまで進み、研究の傍ら常に教育界にも身を置き続けるという、特異な足跡を印している¹。その時々状況によって、文検や無試験検定等の道を選択し、学校制度をも利用して研究を深め、学歴の上昇を図った人物であり、複線型学校体系下において学校と検定とを補完的に位置づけてキャリア・アップを図った一つのモデルケースと考えることができる。拙論ではまず酒井三郎の足跡の特徴を検討し、ついで彼の著述である『《高等教員・中等教員》文検西洋史《系統的》研究法』（以下『系統的 연구法』と略称する）を取り上げ、酒井の文検に対する認識を検討したい。

1. 酒井三郎の半生

酒井三郎は後年、立正大学の教授を勤める²。立正大学西洋史研究会では、年譜・著

1 拙稿「一検定学徒の半生と検定観——石田吉貞（大月静夫）著『若き検定学徒の手記』の考察——」（『比較文化史研究』3、2001）「一検定学徒の半生と教員界——検友会会長・神戸公平著『嵐の中の小舟』等の考察——」（『比較文化史研究』6、2004）「二人の検定学徒・石田吉貞と神戸公平の周辺」（『異文化交流』43、2004）参照。ここで考察した二人の検定学徒は、小検から文検へと進み、基本的に初等・中等の教育界に生きた人物であり、酒井三郎はこの二人とは異なる類型に属すと考える。したがって、前述の二人については「検定学徒」の語を用いたが、酒井については「学究教員」という語をもって類型化しようとする。

2 立正大学は筆者の母校であり、筆者もその名前はよく存じていた。立正大学においては西洋史の大学院の基礎を造った方といていいと思う。筆者の入学する直前に定年退職されて、筆者在学中は非常勤講師とし出講されておられた。残念ながら直接師事することはなく、お話ししたこともない。筆者が検定学徒研究において酒井三郎の名に着目することとなるのは、拙編『四海書房版「歴史教育」総目次』（付執筆索引・解説等）（総合歴史教育研究会、1997）の作成に従事した時で、酒井は「尋国史第十 和氣清麻呂の取扱」（『歴史教育』2-3）「文検西洋史受験について」（同2-4）等を執筆している。

作等を整理している³。ここではそれによりながら整理しなおし、学究教員としての酒井三郎の足跡を考察することとしよう⁴。

年	月	歳	職 歴	学 歴	備 考
T8 (1919)	3	18		高知県立第二（後に安芸）中学校卒業。	
	8		高知県安芸郡芸陽高等小学校代用教員となる		【検定学習】
T9 (1920)	3	19	同校廃校につき自然退職		【検定学習】
T10 (1921)	1	20	高知県安芸郡土居尋常高等小学校代用教員となる		【検定学習】
T11 (1922)		21			【検定学習】
T12 (1923)		22			【検定学習】冬：文検受験のために上京 ⁵
T13 (1924)	8	23	同校退職		【検定学習】
	10		東京府豊多摩郡千駄ヶ谷第二尋常小学校代用教員、後訓導となる		【検定学習】
T14 (1925)	4	24		日本大学高等師範部修身法制経済科に入学（夜間）	【検定学習】 【高師部：夜学】

3 酒井三郎は、その人柄もあって、多数の友人・教え子達と親しい交流を続け、幾冊かの記録を残している。『歴史と教育』（高知県立城山高等学校校友会発行、1949）『開墾記』（文教協会、1949）『土佐犬の一生——教師ものがたり——』（教文堂、1963）『蘆水随筆』（日本談義社、1967）等である。筆者は、2004年11月6日に、高知県立図書館において、上述の書籍を閲覧した。ただし十分な時間を取ることはできなかったので、詳細な検討とはいかなかった。また酒井の郷里へも足を伸ばしたかったができなかった。この内『土佐犬の一生』は友人・知己・教え子等の思い出の文章を集めて編集した。自身の半生期であり、こういう編著によって、自身の半生を描こうとした点に、酒井の歴史家としての独特な見方があらわれているように思われる。また『歴史と教育』は、自身の文章を集めたものであり、こちらも貴重なものである。これらの書籍には、有意義な記事も散見するものの、文検からその後の進学に関する詳細を明らかにするような記述はなされていないように思われる。この点は一層の研究課題である。なお他に、すみ子夫人の俳句などを中心に生涯と知己の思い出等をまとめた『生命の灯燃える日日』（秀文社、1980）もあり、酒井の生活の一面を知ることができる。

4 『世界史研究論叢——酒井三郎博士喜寿記念——』（喜寿記念事業会編、令文社、1977）『立正西洋史』5——酒井三郎先生追悼号——（1982）参照。

5 酒井三郎「受験行」（『歴史と教育』）の略解説による。なお、この時の試験委員は村川堅固・齋藤清太郎である。

	5				文部省検定試験に合格6、西洋史科教員免許状を受ける 【高師部：夜学】
T15(1926)	4	25	茨城県女子師範学校教諭となる		【高師部：夜学】
S 2(1927)		26			『歴史教育』誌に「尋国史第十和気清麻呂の取扱」「文検西洋史受験について」を發表 【高師部：夜学】
S 3(1928)	3	27	茨城県女子師範学校を退職	日本大学高等師範部修身法制経済科卒業	【高師部：夜学】
	4		在学中宮城県師範学校、夜間明善中学校に勤務	東北帝国大学法文学部に入学	【大学】
S 4(1929)		28			【大学】
S 5(1930)		29			【大学】
S 6(1931)	3	30	同大学西洋史研究室助手となる	東北帝国大学を卒業	【大学】
S 7(1932)	3	31	同大学助手を退職。同大学副手、宮城県師範学校、仙台商業専修学校を兼任		『系統的研究法』（大同館）刊行
S 8(1933)	3	32	日本大学講師となり、毎週仙台より出講		
	9		日本大学第三中学校教諭を兼任し東京へ移転		
S 9(1934)		33			
S10(1935)	4	34		東京帝国大学大学院入学	【大学院】
S11(1936)		35			【大学院】
S12(1937)		36			【大学院】
S13(1938)		37			【大学院】
S14(1939)		38			【大学院】
S15(1940)	3	39	日本大学第三中学校主事となる		【大学院】
	4		日本大学予科講師を兼任	東京帝国大学大学院満期退学	【大学院】

6 この時の試験委員は村川堅固・齋藤清太郎である。

S16(1941)		40			
S17(1942)		41			
S18(1943)	3	42	日本大学予科講師を退職		
	4		日本女子大学校教授兼教諭 となり付属高等女学校の授 業を担当		『国家の興亡と歴史 家』（弘文堂）刊行
S19(1944)	3	43	すべての職を退いて高知県 に疎開。私立藤蔭高等女学 校校長事務取扱となる。後 教頭となり、財団法人理事 を兼ねる		

酒井は、中学校を卒業してから教育界に転じ、文検と共に大学での学習へと歩を進めた人物である⁷。こうした悪戦苦闘の結果と戦争の激化とによって、その足跡はかなり複雑なものとなっている。

酒井は中学校を卒業しているのであるから、本来教員志望であったとは考えられない。大正13年（1924）8月に高知県の尋常高等小学校の代用教員を退職し、10月に東京の尋常小学校の代用教員となっている。年譜では翌14年（1925）5月に、文検西洋史に合格していることになっているが、『官報』3837（T14.6.9）広告「第四十二回師範学校・中学校・高等女学校教員検定予備試験合格者」の西洋史に名が見え、「去月施行」とあり、送達は「東京」となっている。つまり年譜の5月とするのは予試受験

7 酒井の中学から教育界への転身の理由をよくわからない。知人でもこの間の理由は知られていないらしい。中学の同期生でも「酒井君が中学を卒業をして、広島高師の入試をパスしながら、入学しなかったのには何か理由がある、と思うが、…（略）…酒井君の場合は、簡単に老養父母の意志に従って断念したのではなかろうか、僕の想像通りである〔編者註、残念ながらそうではない〕とすれば、…（略）…」（岩崎健夫「日本一小さい市の市長から」『土佐犬の一生』）と記しており、「編者」すなわち酒井自身否定しているほどである。なお酒井の否定がどのあたりまでを否定しているのか、判然としないが、広島高師合格が事実とすると、やはり相当特殊なことであったと思われる。ここで「老父母」云々の論及がある。酒井は「風樹の嘆——父の死——」（『開墾記』）において、父に関する思い出と共に、生い立ちの一端を記している。それによれば、父に対して「わたしが二歳の時、他家からもらわれて来て、今日まで、それこそ筆舌に尽し難い恩がある。…（略）…わたしが東京へ出る時、極力反対したのも、わたしの病体の故であった。わたしを養ってくれた母がなくなつて、男手一つでわたしを育てねばならなかつた父の辛苦は、並大抵ではなかつたろうと思う」と記しており、養子であること、養母ははやくに亡くなったことなどを知ることができる。記述によれば、父は「米商」を営んでいたといい、それなりの経済状況であったようであるが、「商売気は全くない」ひとであったという。なお、酒井は孝養を尽くせなかったことを述べているが、それでも特段の諍いのあったことは記していない。なお酒井の養子に出された理由は、生母の病死（チフス）であるという（島本丑吉・福重「老人と孫との対談」『土佐犬の一生』）。話者の島本夫妻は酒井の先妻の両親である。

の月ということになる。『官報』3840（T14.6.12）広告「第四十二回師範学校・中学校・高等女学校教員検定本試験日時割」によれば、西洋史は7月6日（月曜日）9時より東京女子高等師範学校において行われることとなっている。その後『官報』3878（T14.7.27）広告「第四十二回師範学校・中学校・高等女学校教員検定本試験合格者」の西洋史中に名が見える。細部に涉ることであるが、酒井の文検合格は7月と訂正されるべきである。

酒井の学究教員としての足跡で解明すべき課題の一つに高等文検はどうであったのかということが知りたい点である⁸。高等文検の実態については不明な点が多い。高等文検は毎年行われるわけではなく、このころ昭和2年に行われたことが知られる。『官報』S2-115（S2.5.20）広告「高等学校高等科教員試験検定施行日時割及場所」によれば、6月中下旬に行われている。しかし日東史は行われているが西洋史は実施されていないようであり、『官報』S2-153（S2.7.4）広告「高等学校高等科教員試験検定合格者」にも日東史の合格者はみえるものの西洋史の合格者は見えない⁹。筆者の見た限りでは酒井に関して高等文検受験に論及したものは見られない。

酒井は上京後、日本大学の高師部修身法制経済科（夜間部）に入学している¹⁰。高師部に進んだことは、中等教員となる道を模索していたとみるべきものと思う。当時の日大高師部には地歴はなく、修身法制経済科に進んだ理由は明らかではない¹¹。酒井はその後、文検西洋史に合格し、翌年には茨城県女子師範学校教諭となって、中等

8 酒井の高等文検受験との関わり方によって、後述の『系統的研究法』の評価はかなり異なると考える。筆者は今のところ、酒井は高等文検を視野に置いていたものの、実際には受かってはいないと推測する。なお酒井が実際に高等文検を受験したか、していないかについては、高等文検の開催を確認できていない現状では推測しうる段階にないと考える。

9 昭和2年の『官報』を調査した限りでは確認できない。

10 日大高師部の入学資格は「一、師範学校卒業者／二、中学校卒業者／三、専門学校入学者検定規程ニ依ル試験検定ニ合格シタル者／四、専門学校入学者検定規程第八条第一号ニ依り、一般ノ専門学校入学ニ関シ指定ヲ受ケタル者／五、小学校本科正教員ノ免許状ヲ有スル者」（明治42年4月5日改訂「学則」、『日本大学百年史』4、2004）とあり、酒井は第二項に該当する。なお本規程において小検合格者までを網羅している点は興味深い。検定学徒にとって「小本正」はなかなかの難関であった（註1拙稿参照）。しかしこの規程によれば、「小本正」から高等師範科へという通路の開かれている点は留意すべきであろう。註1拙稿「一検定学徒の半生と検定観著」において、石田吉貞は「東京の夜学」を敵視していたが、検定学徒からすると、検定の道を「小本正」までたどり着いた有力な者を、持って行かれるわけであるから、反感を覚えるのも当然といえようか。検定と私大の高師部の交流については一層検討すべき課題であろう。

11 なお日大では、1926年3月に高等師範部地理歴史科が認可・開講されている。その後1929年に無試験検定の免許状が授与されている。こうした動向の中で、酒井の日大での学習がどのようなものだったかは、興味あるが詳細は不明である。

学校の教員となる課題は達せられたのである¹²。しかし酒井はより高度な目的を有していた。日本大学高師部卒業後、東北帝国大学法文学部に入学した。高師部を卒業したことによって、いくつかの帝大への入学資格を得ることができたのである。詳細な経緯は不明ながら、東北大学へと進み、本格的に西洋史を学ぶこととなった¹³。東北帝国大学卒業後は二ヶ年間助手として勤め、その傍ら母校日本大学の講師となり¹⁴、その後日本大学第三中学校教諭として東京へ¹⁵、そして東京帝大の大学院へと進学し

12 住まいも水戸に移している。したがって夜学とはいえ、東京との往復はかなり大変であったろう。当時の茨城県女子師範学校の教え子の回想には「あの二年間、今考えると、彼は殆んど生徒のために時間を費していたように思うが、その間に日大の夜学に東京まで通学、そしていろいろの研究を続けておられたので、全く驚くほかはなかった。もっともあの頃、彼は、三時間眠れば沢山だといったことがあった」（中山栄子「父親のような彼」『土佐犬の一生』）とあり、精力的に活動していたことがわかる。なお茨城女師では西洋史を担当している。

13 東京帝大は入学資格を「高等学校高等科ヲ卒業タル者又ハ之ト同等以上ノ学力アル者」（「通則第五条」東京帝国大学編刊『東京帝国大学五十年史』1932、p. 607）として、高等師範学校の卒業生などには門戸を閉ざしていた。したがって酒井は後に東京帝大の大学院へと進むが、東京帝大へと直接進学することはできなかった。一方東北帝大は、高師の卒業生や女性に門戸を開いていた。「東北帝国大学法文学部規程（大正11年12月28日制定）」（『東北大学百年史』8、資料1、2004）によれば、やはり「高等学校及学習院」の卒業生を優遇するのであるが、欠員のある場合の入学志願者として、第六条に「一、高等師範学校女子高等師範学校高等商業学校外国語学校其ノ他之ト略同等程度ノ学校卒業生ニシテ本学部ノ授業ニ堪フト認ムル者／二、本学部ニ於テ臨時施行スル検定試験ニ合格シタル者」の二項を掲げている。この内、日大の高師部を卒業している酒井は、第一項の「之ト略同等程度ノ学校卒業生」に該当しよう。なお第二項の独自の検定試験は興味深い規程である。酒井の同級生は、当時の東北帝大の様子について、「大体当時の東北大学法文学部というところは、新設間もなく高等学校（旧制）からくる人は少く、高師や専門学校を卒えて、一度職業についた人も沢山入ってきたので、中には先生方より年輩の、リュウッとした人士もいたが、彼はいつも詰襟の学生服きて、真面目に通学しておられた」（池田哲郎「仙台から」『土佐犬の一生』）と述べている。当時の東北帝大において酒井は特段に特殊な足跡を歩んできた学生とは見られなかったことを示しているよう。

14 この間の事情を日大三中で同僚であった鮎沢信太郎は「…（略）…彼は仙台から週一度上京して、日本大学高等師範部で西洋史を講ぜられた。…（略）…当時、彼は日大の先輩の中で、ただ一人の新進西洋史学者として光っていた。それがこの人をして、仙台から東京まで出張講義させる所以であった」（「日大三中時代の彼を語る」『土佐犬の一生』）と述べ、日大出身者として一目置かれていたことがわかる。

15 日大三中で同僚であった鮎沢信太郎は、酒井の日常を「限りなく忙しい日日の生活を彼はどこかで、見事に区切った。そして、夜は日大高師部の講義を継続された。また新宿予備校などという予備校にも出てかせいだ。そして、更に、それが同時期なのか、それとも、あとさきになっているのか知らないが、日大三中時代の彼は、東京大学の大学院に籍を置いていたし、東京外語学校の夜間部のフランス語科の学生でもあった。もちろん、彼のことであるから、大学院や学校に単に学籍を置いていただけではなかった。大学院への年々の研究報告もしたし、外語も卒業された」（「日大三中時代の彼を語る」『土佐犬の一生』）と述べ、引き続き精力的な活動を展開していたことを伝えるのである。なお日大三中の教師としては、文検合格者らしく受験指導の厳しさは定評があり、加えて『日大三中研究年報』の刊行に尽力したことを特記している。この『研究年報』に関して、鮎沢は酒井の「ひととは吾々の研究を『中等教員らしからぬ研究』というであろう。しかし『中等教員に捉われているものが、果して真の中等教員になれるだろうか』と、我々は反問したいのである。…

ている¹⁶。

以上の酒井の学歴を大まかに示せば「文検→私大高師部（夜学）→帝大→帝大大学院」ということになる。これは学究教員の学歴としては最も難関のコースではあるまいか。

また酒井は、常に多様な学校で教育活動に携わりながら学び、研究を深めてきた。教育者としても優れていたらしい。教育活動と研究活動とを両立させたのは酒井の非凡な点であり、学究教員らしい生き方である。

2. 『系統的研究法』の概要と特色

酒井の文検学習に関する集大成といえるものが、『系統的研究法』すなわち『《高等教員・中等教員》文検西洋史《系統的》研究法』（大同館書店、昭和7年〔1932〕）である。酒井は昭和6年（1931）3月に東北帝国大学を卒業し助手となっており、その時の著作である。

本書執筆の基本的な立場を「自序」によってみよう。酒井は文検を「私にとつては思ひ出多い経験であつた」と述べている。そして「私は幾度か過去の思ひ出を棄てたいと、願つた」とし、「今や私は思ひ切つてこの旧衣を脱がうと思ふ。過去の思ひ出を清算する時が来た。この時生れたのが本書である」とする。つまり本書は酒井にとって検定学徒としての半生を精算するための書であるということができよう¹⁷。

また酒井は文検を「私にとつては苦い経験であつた」と述べている。そして「貴重

（略）…」（『日大三中研究年報』5の序文）とあるのを引いて、その「研究宣言」の20年後の今日においても有意義であることを述べている。こうした姿勢こそ、筆者の酒井を「学究教員」と評すゆえんである。なお鮎沢の記述によれば、当時の日大三中の校長も、『研究年報』の趣旨を理解し、支援していたようであり、卒業生の話からも「あの頃の日大三中の先生たちには、すごい勉強家が大勢いましたね」という話になるという。さしずめ「学究教員」の学校の様相を呈していたことになるろう。

16 明治44年改正の東京帝国大学大学院「大学院分科学生規定」（東京帝国大学編刊『東京帝国大学五十年史』1932, p. 138）によれば、東京帝国大学分科の卒業生を優先して入学を許可し、「卒業生ニ非サル者」は試験委員による学力の検定を受けるものとし、その上で「他ノ分科大学又ハ他ノ帝国大学ノ卒業生」は教授会において「必要ト認ムル科目ニ就テノミ」検定を受けるものとしている。大学院入試の実際はともかくとして、この規定によれば、東北帝大の卒業生である酒井は、帝大の卒業生には劣るものの、ある程度有利な計らいを受けたものとみられる。なお普通に考えれば、東北帝大の恩師の大類伸の口添えがあったであろうと推測される。

17 ここで酒井は文検の思い出を精算しようとしている。しかしこれは、あくまでも本人の願いである。友人の岩崎健夫は、酒井より受験のために史実を年月日順に全部暗記していると聞いて、合格すれば忘れる性質のものであらうと質問したところ「これは恐らく死ぬまで捨たらないだろ」（「日本一小さい市の市長から」『土佐犬の一生』）と応えた、というエピソードを紹介しており、文検のための学習が酒井の学問を貫いていることを自覚していることの一端を示していよう。

の時間を私はこのために浪費した」とし、「私は少くとも同じ道を後から来る人々のために、より安らかに、より上手に歩むことをすゝめたい」とする。別の言い方では「より手近き手引草」の書であるとする。本書の概要は以下のようなものである。

総説

〔一〕 若人よ起て 〔二〕 受験と研究 〔三〕 西洋史と語学 〔四〕 自ら拓く道

各説

第一部 中等教員の部

〔一〕 諸規程 〔二〕 試験委員管見 〔三〕 教科書論 〔四〕 参考書について 〔五〕 受験準備及び受験について 〔六〕 試験を終へて

第二部 高等教員の部

〔一〕 教員規程と教授要目 〔二〕 検定委員について 〔三〕 指定参考書について 〔四〕 政治史と文化史 〔五〕 研究へ

結語

附録

〔一〕 文検中等教員試験問題一覧表 〔二〕 試験問題解答について 〔三〕 邦文西洋史参考書一覧

本書は、中等文検だけでなく高等文検をも視野においた文検西洋史受験のための書である。大きく「総論」「第一部 中等教員の部」「第二部 高等教員の部」よりなっている。たとえば「受験準備及び受験について」（第一部〔五〕）では、「受験準備／読書／整理／記憶／擬答案について／問題集について／問題解答集について／受験一般について」の各項目に分けて詳述しており、西洋史の文検受験のための参考書・手引き書として性格を具備している。しかし本書は、そうした参考書に留まるものではなく、「第二部 高等教員の部」では、丹念に「指定参考書」の概要を整理して提示している。酒井の言によれば、これらは完全に読まねばならないものではないし、手に入る必要のないものもあるとする。「受験生諸君に本を手にはせずして内容の一斑だけでも知らせたい」として、詳細に解説する。その趣旨は、

要するに私の願は、暇ある毎に相共に以下の史籍によりよく親しみ、その混々たる源泉に遡って、自己成長のよすがとなさんことを期すのみである。

とあり、単に高等文検の合格のためというよりも、「自己成長」を目指すより高度な学習のためと位置づけている。その上、「政治史と文化」において研究の基礎的課題を述べ、研究への道筋を示し、研究へと誘うのである。「《系統的》研究法」とは、文検のための学習を積み重ねつつ、学問的高見へと自らを導いていくための研究法を系統的に整理した書ということができるであろう。

酒井三郎の目指す研究はどのようなものであったろうか。酒井は基本的に西洋史の研究者であるが、その根底において世界史を志向している¹⁸。『系統的研究法』においては、

…(略)…歴史を分つて国史、東洋史、或は西洋史とすることは研究の便宜上からである。…(略) …然らば東洋文化圏と西洋文化圏の境界は如何といふことになると、非常に面倒になつて来る。茲に国史はともかくとして東洋史、西洋史は便宜上のものであることを感ずる。而してこゝに世界史的研究が問題となつて来るではなからうか。たとへ世界史的綜合が未だ出来ないとしても、世界史的な企図は既になされつゝあり、吾々に於ても亦、世界史的な觀照を持たねばならない。

とあり、また

…(略)…実用的見地にたてば、西洋史の研究者は或程度まで国史、東洋史に通ずることを要し、国史、東洋史の研究者も亦同様である。況んや、中等学校に於ては、多くの場合一人にして国史、東洋史、西洋史を担任すべきであり、教授要目も明かに三者相互の連絡を重視するから、三者各に対して知るところがなければならぬ。

とあり、東西洋史の「世界史的綜合」を志向し、「世界史的な觀照」の必要性を主張し、新しい歴史の枠組みとして「世界史的な企図」のすでに成立していることを述べる。また教育の実際的場面における国史・東洋史・西洋史の兼修の必要性と、「教授要目」における三者の関連を重視する動向を示す。本書の自序は昭和7年3月付である（奥付は5月18日印刷、22日発行）が、その後8月30日付けの文部省令により、翌8年からは歴史科の教員になるためには日本史・東洋史・西洋史の各試験に合格しなければ

18 なお酒井は戦後に「世界史研究会」を主催し、『世界史研究』誌を刊行することとなる。この間の動向は、別稿「世界史研究会の歩み——酒井三郎を中心とする戦後の世界史研究活動——」（『総合歴史教育』42、2006掲載予定）参照。

ばならないこととなり、歴史科の検定学徒に衝撃を与えた¹⁹。したがって酒井の世界史的認識の主張は、旧来の日東史と西洋史に分かれていた文検受験者にとっては新鮮な響きをもったことであろうし、これまで対象外であった日東史受験者をも読者層に加え、時宜を得た書であったことになる。

3. 酒井三郎の文検観

酒井は文検についてどのように考えているのであろうか。以下『系統的研究法』の内「総論」の記述を中心に検討を加えることとする。まず酒井は、

人を教育することゝ、自ら修養をつむことは根本的に相反することであらうか。否、自ら進みつゝある人のみ他人を教育することが出来る。教育するとは被教育者と共に教育者自らも亦進むことである。自ら進むことが教育を妨げ、教育が自己の向上を阻止するものとせば、それは教育そのものゝ必然的なものに非ずして制度より来る欠陥である。

と述べ、教育と教員の「修養」とは相反するものではなく、統合的に捉えられるべきものであり、その上で教員の「向上」を阻む欠陥が制度上に存在することを指摘する²⁰。今日的に言えば研修権の主張ということができよう。こうした背景には、小学校教員の置かれる厳しい現実がある。端的に言って、この欠陥とは小学校教員の待遇である。酒井は、

抑も小学教員、中等教員乃至高等教員は地位の高下の差であらうか。否、断じて否、吾々は教育の本質より見て、かくいふことに躊躇しない。これ等は教育の道、いはゞ職業に於ける方面の差異であり、横の関係である。従つて中等教員の資格をとり、高等教員の資格を得ることは、小学校教員の職に止まるに何等差支へはない。寧ろ、それこそ理想的である。かくてこそ小学教員の地位は最も輝かしく、又重きをなすものであると思う。もつと極言すれば、かくの如くして次の如くいふことが出来る。即ち、小学教員も高等教員も同じレベルの俸給と時間とが与へられねば

19 拙稿「『文検』歴史科について——概要と足跡——」（『比較文化史研究』創刊号、1999）参照。

20 なおこの一連の文章は「砂を噛む」（『歴史と教育』、原載は『二三会誌』3、1931.7.30）に基づいている。これには「人を教育することゝ」云々の前に「教育者には少なからざる悩みがある。自己の修養を如何にすべき乎ということは、重大なその一つである」という記述がある。酒井自身も研修をめぐる悩みは深刻であったことを知ることができよう。筆者の類型化しようとする「学究教員」は、教育実践と自己の研修、特に研究活動との間に呻吟しつつ、研究の道を究めようとする人たちということになる。

ならぬ。そして勤労時間に正比例して多くの俸給が与へられねばならぬと。然るに現状を見よ。小学教員の如何に瑣々たる事務に忙殺されねばならぬか。あゝ徒らに事繁き小学教員生活は吾等の精神と肉体とを消耗しつゝあることよ！従つて修養の時間は永久に消えてゆく。かゝる事務はどこまで初等教育と本質的に関係することであらうか。

と述べ、小学校教員と中等学校以上の教員との間に地位の上下はないこと、小学校教員が中等以上の教員資格をえて小学校教員を勤めることがその地位の上昇に繋がること、小学校教員の雑務に忙殺されている現状、等を指摘する。戦前の学校における教員の待遇は初等・中等・高等段階によって、相当の格差を生じており、加えて中等学校においては高等師範系が優位を占めている状況に、文検学徒は不条理を感じている。酒井は、

…（略）…吾々は歩をすゝめて師範大学の如きは寧ろこれを廃して、文検を国家試験として齊しく教員たらしとするものに課することを要求する。そは経費節約の上からも、学校出の特権廃止の点よりするも、将又国家の教員思想対策の上からも至極適當のことと思ふ。（一 若人よ起て）

と述べ、当時の「師範大学」構想の廃止と、文検の「国家試験」化とを主張する。いくつかの理由を挙げるが、なかで「学校出の特権廃止」の主張は切実なものがあると考えられる。文検は中等教員あるいは高等教員としての資格を認定するものでありながら、難関を突破してもなかなか就職できない実態がある。対等の土俵で勝負しようとするとともに、複線型学校体系への批判ということができよう。

また複線型学校体系において、小学校教員の主要な供給源は、師範学校であり、それを補足する形で教員検定を実施している。小学校教員界において、師範出は学閥を形成し、検定出の教員はそのしわ寄せを受けている実情がある²¹。しかし師範出にしても、進学については、高等師範学校への細い道しか開けていないので、学問的に探求しようとする则在職研修を目指さねばならないこととなり、自然文検へと向かうこととなる。酒井は、

…（略）…教員の資格を得ることは直ちにその地位の伴ふことを望むものではない。…（略）…教育者は…（略）…功利的な教育観に立つてはならぬ。それは同時に自己を律する格律でなけれ

21 註1 拙稿参照。

ばならぬ。知識階級に失業者の続出する今日、吾等の資格が同時に地位を伴ふことを望むべきでない。かくの如き考にて試験を受け、資格をとることは、学校卒業と同時に食にありつけるものと考へる現代の通弊と一つである。

と述べ、「資格」と「地位」を直結させる功利的な考え方を戒める。高等師範学校の卒業生が必ず教職に就けるのに対して、文検合格者の就職は、運や縁故に左右される。一方に確実に就職できる方法のある以上、検定により高次の意義を見いだす必要があるのである。さらに酒井は、

合格は容易でないまでも不可能ではない。…（略）…自己の合格をより有意義ならしめるのは、その後の研究である。しかしながら、合格後少くとも一つの岐路がある。一は文検中等教員の他科に転戦することであり、他は一科をより深く進めんとすることである。前者は既に述べた如く容易であり、後者はとも角も困難な道である。…（略）…只私の考を以てすれば、百科全書的な各科の涉猟よりも一科の深き研究をなすことが現代の要求でもあり、又中等教員自らをしてより重きをなさしめるものであると考へる。（二 受験と研究）

と述べ、合格後の「研究」の必要性を指摘する。このことは文検を「研究」の一つの通過点に置くものであり、教員としての「研究」生活を前提として文検を位置づけるのである。そして「研究」生活を進めるには、他課目に転戦する道と一科目を深く探究する道とがあり、困難ではあるとしながらも後者を薦める。これこそ酒井の歩んできた道程なのである。

酒井は文検受験と「研究」とを一続きのものとして把握させようとする。しかしあえて「研究」の重要性を述べねばならないように、両者は本質的に異なる性質のものであり、その質の違いがあるからこそ、自身でも文検の思い出の「精算」をしなければならぬのである。酒井は、

研究と受験とは浩然分たねばならぬ事柄である。研究とても時間と範囲とを考慮しなければ能率を上げ得ないことは勿論であるが、それは元来無限に継続するものである。之に反して受験は一定のレベルに達するとそれで終りである。従って時間と範囲との制限を受けることが前者の比でなく、永久的の性質を有しない。

と述べ、研究は無限に継続すべきもの、受験は一定のレベルに到達すればそこで終わるものとし、受験は時間と範囲の制限を受けるものとする。この質的な違いから文検受験のための学習方法の特質が導き出される。続けて酒井は、

こゝに於て受験は一面研究よりは容易であり、他面困難でもある。…(略)…そこに受験のコツがある。要するに、受験は方法さへうまくやれば早く合格に達し得る。…(略)…知識学科は要するに記憶の試験である。歴史などは高等教員試験まで記憶が主であるといつてよいと思ふ。従つて如何によく記憶するかゞ先づ第一に考へねばならぬ問題である。記憶には観念の整理が必要である。観念の整理には学科により異つた方法が存し、歴史科に於ては、又それに応じた方法があらう。私は假に時代的なそれと因果的なそれとがあり、これ等を包含しつゝも別箇の方法として地理的なそれがあると思ふ。又これを記憶に訴へるためには運動型、視角型乃至は聴覚型など個人のタイプによつて諸種の方法がとられねばならぬ。要するに自己の個性を知ることによつて、その個性に即した記憶の方法がとられねばならぬ。然らざれば勞して功少い結果となる。

と述べ、文検「受験のコツ」を「記憶」であると断言し、記憶のためには「観念の整理」の必要性を述べる。『系統的研究法』は全体としてみると、文検西洋史受験のための一つの「観念の整理」の試みの書といふことのできるものなのである。

それではこうした文検受験は学術的な研究に対して、どのような意義を有すものとみなすのであろうか。酒井は、

模倣は創造への予備段階でなければならぬ。歴史は一つの創造である。人類が自然を征服しつくり得たる文化発達の過程である。書かれたる歴史も亦創造でなければならぬ。吾々は他人の叙述を通してこれを歴史事実に還元し、然る上に吾が叙述を再構成するのである。(四 自ら拓く道)

ここでいう「模倣」の語は直接的に文検受験のための学習を指すわけではない。しかし歴史を「創造」であるとする以上、歴史の学習は「模倣」から「創造」への道程を歩まねばならないこととなろう。酒井は続けて、

歴史をつくる要素である人類は創造するものである。人類の一員たる個人の歩まんとする道も亦一つの創造である。彼は独自の存在であり、何物を以ても代へ得ない価値の所有者である。彼の生涯の足跡はそのまゝには他の追隨を許さないものがある。こゝに彼の歴史がある。吾々は徒ら

に他人の糟粕をなめ、その模倣を事とすべきでない。自らの道を有せねばならぬ。受験生活も亦その一歩である。(四 自ら拓く道)

と述べ、一人の個人の足跡の意義を「創造」に置く。「創造」こそ個人の「歴史」すなわち価値なのであり、決して「模倣」に終わるべきではないとし、受験を「創造」への「一歩」を踏み出すものと位置づけるのである²²。

おわりに

酒井にとっては、文検も一つの方便であり、研究と教育の両立を図ることができ、よりよい条件を得ることができれば、可能な限りよりよい条件を追求したのである。一見雌伏に富むようにみえる酒井の前半生も、教育活動と研究活動の両立という点では一貫したものであったのではないだろうか。筆者は別稿において、石田吉貞（大月静雄）の「学校」と異なる「文検→高教→学位→真理」という図式を描いてみせたことを論じた²³。しかし学問が進めば進むほど、文検のための受験型学習では対応できない学術研究の領域が存在する。酒井は学校と文検の二つの道を渡った人物であり、二つの道を整合的に捉えて、文検学習を位置づけようとした人物と見る事が可能であろう。当時の文検合格は就職に直結するものではなかった。酒井は『系統的研究法』において、文検を研究生生活への入り口として位置づけ、文検から研究生生活へ到る道筋を「系統的」に描き出そうとしたのである。そして小学教員も高等教員も序列のないことを主張し、文検を通じて研究する教員として小学校教員の地位の向上を図ろうと提唱するのである。こうした主張は、実際の小学校教員の待遇からすれば現実的なものとはいえないものであったろうが、文検受験に向かう受験者の心情として看過しがたいものといえるであろう。

22 酒井は続けて「吾々は先輩の残したものを見ねばならぬ。受験記も解答案も、将又準備法も。然し是等は結局他人のものである。他人のものは終に他人のものであつて、吾のものではない。その面の如く、吾が他と異なる以上、どこまでも他人と同様にすゝむことは出来ぬ。要は自己のプランを有すべきである。他人によつて生くべきでなく、自ら生くべきである。自らの道は自らによつて拓かれねばならぬ。そこに大いなる喜が存するのである。これは、うち寄せる波に洗はれた海浜を歩んで、未だ何人も踏まない真砂の上に吾が足跡を印するに似てゐる。見よ、朝の海浜を歩む彼の姿を。太陽は水平線上に昇りて、金波、銀波が躍つてゐる。而して彼が足跡は新たな真砂の上に一歩一歩を印しつゝ、遠く彼方に続く。こゝに自ら拓くものゝ喜と意氣と而して又彼の歴史とが見られないであらうか。」と述べる。やや詩的な表現を含むが、文検を単なる受験技法と捉えるのではなく、先人の受験方法に学びつつ、独自のやり方を開拓することを求めるのであり、こうした姿勢があつて始めて研究への歩みを踏み出すことができるとするのである。

23 註1 拙稿参照。

酒井の学歴は、複線型学校体系においても、文検や夜学など多様な学習機会が設けられており、そうした道を巧みにかいくぐることによって、多様な可能性の存在していたことを示しているといえよう²⁴。

²⁴ 筆者は註1 拙稿において、石田吉貞・神戸公平の両者に「超人」というような評のあったことを指摘している。酒井三郎も、やはり「超人」と評す部類の人というべきであろう。